

儀礼的なうその発達

田村 綾菜

1. はじめに

私たちは、他者との関わりにおいて、必ずしも常に自分の気持ちを相手にそのまま表すわけではない。例えば、期待はずれのプレゼントをもらったときに、がっかりした気持ちを隠し、笑顔で「ありがとう」と言うことがある。このように、場面に応じて情動表出を調整できるようになることは、他者との関係を維持したり、発展させたりするために重要であり、子どもの社会的適応を考える上で考慮すべき問題であると考えられ、乳幼児期から児童期を中心とした発達研究が盛んに行われてきた（子安・田村・溝川，2007; Zeman, Cassano, Perry-Parrish, & Stegall, 2006）。これまでの研究では、主に表情などの非言語的な表出の調整に焦点が当てられてきたが、近年、言語的な表出の調整という側面に着目した研究が行われている。そこで、本論文では、対人場面における言語的な表出の調整に関連する発達研究を概観し、今後の研究課題を検討することを目的とする。

2. 表示規則について

子どもは、表示規則 (display rules) を少しずつ学ぶことによって、情動表出を調整することができるようになるといわれている (Saarni, 1979)。表示規則とは、どのような場面でどのように情動を表出すべきかといった情動表出に関するルールのことである (Ekman & Friesen, 1969)。子どもの表示規則の理解を調べるには、主に以下のような2つの方法が用いられてきた。

1つは、仮想場面を用いる方法である。例えば、「誕生日にプレゼントをもらったが、そのプレゼントが期待はずれのものであった」などの物語を子どもに聞かせ、主人公はどんな気持ちで、どのような表情をしようか、それぞれいくつかの表情図から選んでもらう。この場合、本当の気持ちについては悲しい表情図などを選び、見

かけの表情については笑顔の表情図を選ぶことができれば、その子どもはこの場面での表示規則を理解しており、ルールに従って情動表出の調整ができると解釈する。また、なぜ本当の気持ちとは異なる表情をするのかについての理由づけをたずねることで、表示規則が知識として確立されているかを調べることもある。

もう1つは、実験場面における子どもの実際の反応を観察する方法である。この方法でも「期待はずれのプレゼント」の場面がよく用いられる。1回目には子どもが喜ぶようなプレゼントを渡しておき、2回目ががっかりするようなプレゼントを渡したときの子どもの表情などを録画し、分析するといったものである。

後者の実験的観察による研究では、3～4歳児の多くは、「期待はずれのプレゼント」を受け取っても、がっかりした気持ちを抑えて笑顔を見せるといった表示規則に従った表出を行うことができることが示されている (Cole, 1986)。それに対し、仮想場面を用いた研究では、4歳児にとって、見かけの表情が本当の気持ちとは必ずしも一致しないことの理解は難しく、6歳頃までに理解できるようになることが示されている (Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson, 1986)。さらに、児童期を通して、情動表出を調整する方略が洗練したり、動機などの理解が進んだりし、11歳頃までに表示規則の知識が確立すると考えられている (Gnepp & Hess, 1986; Saarni, 1979, 1984; Zeman & Garber, 1996)。

ここまでみてきた先行研究では、表示規則は主に表情などの非言語的な表出の調整に関するルールとして扱われてきた。唯一、Gnepp & Hess (1986) では、仮想場面において、主人公がどんな表情をするかという質問に加え、なんと問うかも質問し、言語的な表示規則の理解についても検討している。その結果、表情の表示規則よりも言語的な表示規則の理解の方が発達していることが示された。しかし、いつ頃から子どもが言語的な

表示規則を理解するようになるのかという問題については長らく検討されてこなかった。次節以降、この問題について検討した研究を概観する。

3. 儀礼的なうその発達

言語的な表示規則の代表例として、white lieが挙げられる。white lieとは、「悪意なく述べられる真実でない発言」のことであり(Bok, 1978)、自分の失敗や約束違反などの行為を隠すためのうそや、相手を騙すためのうそのような、反社会的なものともみなされるうそとは異なり、むしろポジティブな価値をもつと考えられるうそである(Talwar & Lee, 2002b)。日本語では、「儀礼的なうそ(楯・新井, 2004)」や「たわいのない嘘(上宮・仲, 2009)」などと訳されているが、表示規則というルールに従うものとして扱うことから、本論文では「儀礼的なうそ」という訳を用いることとした。

ちなみに、楯・新井(2004)では、「本当は好きではないプレゼントを貰ったときに贈り手に気を使ってプレゼントを「気に入った」と言うように、相手の感情を傷つけないように配慮して発言される「うそ」である」と定義され、上宮・仲(2009)でも、「相手を傷つけないための、必ずしも悪いとはいえない嘘」と述べられている。これらのことから、「相手を傷つけないようにする」ことが儀礼的なうそをつくる第一の動機であると考えられる。

子どものうそについてはこれまで多くの研究が行われているが、その焦点は自分の失敗や約束違反などの行為を隠すためのうそや、相手を騙すためのうそが中心であった。それに対し、Talwar & Lee(2002b)は、3~7歳の子どもを対象に、子どもが儀礼的なうそをつくかどうかを検討した。用いた課題は、Reverse rouge taskという課題である。この課題では、子どもは実験者からポラロイドカメラの使い方を教えられ、実験者を撮影するように頼まれる。写真を撮る前に、実験者は自分の見た目は大丈夫かを子どもに尋ねる。このとき、実験条件では、実験者の鼻に目立つ印がついている。そして、写真を撮った後、その実験者が部屋からいなくなり、別の実験者がやってきて、現像された写真を子どもと一緒に見ながら、彼

(彼女)の見た目は大丈夫であったかを尋ねる。このとき、写真を撮った実験者の前では鼻の印を指摘しなかったにもかかわらず、その実験者がいなくなってから、別の実験者の前では鼻の印を指摘した場合に、儀礼的なうそをついたとみなした。その結果、年齢に関係なく、全体の約90%の子どもが儀礼的なうそをついており、わずか3歳でも儀礼的なうそをつけることが示された。自分自身の違反行為を隠蔽するためのうそについて検討した研究においても、3歳からうそをつけることが示されており(Talwar & Lee, 2002a)、儀礼的なうそも同様の時期から発達することが示唆された。

また、Talwar, Murphy, & Lee(2007)は、3~11歳児を対象に、情動表出調整の発達研究でよく用いられる「期待はずれのプレゼント」課題を実施した。分析の指標として、先行研究と同様の、プレゼントが期待はずれだったときの非言語的な表出に加え、子どもに直接そのプレゼントが気に入ったかどうかを尋ねることで、言語的な表出についても分析できるようになっていた。その結果、親にはそのプレゼントを気に入っていないと告白したが、実験者には気に入ったと答えた子どもは全体の77%を占めていた。そして、年齢群ごとにみると、3-5歳児では72%、6-8歳児では80%、9-11歳児では84%と、年齢とともに儀礼的なうそをつく子どもが多くなることが示された。さらに、7, 9, 11歳児を対象に期待はずれのプレゼント課題を実施したXu, Bao, Fu, Talwar, & Lee(2010)では、7歳児で40%、9歳児で50%、11歳児で60%の子どもが儀礼的なうそをついたことが報告されている。

このように、研究によって、儀礼的なうそをつくる子どもの割合にはバラつきがあることから、一度、儀礼的なうそをつけるようになったからといって、常に子どもが儀礼的なうそをつくとは限らないと考えられる。Tawlar, Murphy, et al.(2007)では、子ども一人の条件と、親が同席し、期待はずれだったことは言わないように教示した条件とを比較しており、後者の条件の方がより多くの子どもが儀礼的なうそをついたという結果が報告されている。この結果は、子どもは親からのしつけなどの影響を受け、繰り返し儀礼的なうそをつくる経験を積むことで、表示規則を習得してい

く可能性を示唆している。

4. 儀礼的なうその機能と動機づけ

前節において、儀礼的なうそをつく第一の動機は、「相手を傷つけないようにする」ことであると考えられると述べたが、儀礼的なうそには、聞き手の気持ちを傷つけることを避けるという他者志向的な機能だけでなく、話し手が真実を述べた際に、聞き手からネガティブな反応を受けることを避けるという自己防衛的な機能が存在すると考えられる (Talwar & Lee, 2002b)。例えば、Heyman, Sweet, & Lee (2009) は、7～11歳時を対象に、「真実を述べること (truth-telling)」と「うそをつくこと (lie-telling)」についての道徳判断をさせたところ、期待はずれのプレゼントをもらう場面において「うそをつくこと」をより好ましいと評価し、その動機づけは向社会的なものだと推測する傾向が強いことが明らかになった。特に、その発言がうそか本当かという点よりも、相手に与える影響に注目するほど、その場面で「うそをつくこと」はよりポジティブに、「真実を述べること」はよりネガティブに評価しており、その反応パターンに年齢差はなかった。このことは、儀礼的な場面では、うそをつく方が高い評価が得られ、真実を述べる方が評価は低くなるということを示している。

こうした儀礼的なうその機能を子どもはどの程度認識しているのだろうか。Talwar & Lee (2002b) は、儀礼的なうそをついた子どもに、なぜ写真を撮るときに鼻の印を指摘しなかったのかを尋ねると、実験者に恥ずかしい思いをさせないためだという他者志向的な理由を答えた子どもは62人中わずか5人、実験者に怒られたくなかったからだという自己防衛的な理由を答えた子どもは1名のみで、約半数の子どもが「気づいていなかった」あるいは「言い忘れた」と答えるか、何も答えなかった。すなわち、3～7歳の子ども多くは、このような状況では儀礼的なうそをつくる必要があることを暗黙的に理解しているものと考えられる。また、Xu, et al. (2010) において、儀礼的なうそをついた7歳児はネガティブな結果を避けるためといった自己防衛的な動機を答える子どもが多いのに対し、9、11歳児はプレゼントを

くれた人の気持ちを傷つけないためといった他者志向的な動機づけを答える子どもが多かった。これらのことから、3歳から11歳にかけて、儀礼的なうそをつくる割合が高くなるという発達的变化のみならず、儀礼的なうそをつくる動機づけが、自己防衛的なものから他者志向的なものへと発達的に変化することが示唆される。

5. まとめと展望

本論文では、言語的な表示規則としての儀礼的なうその発達に関する研究を概観した。その結果、3歳頃から儀礼的なうそをつくようになり、11歳頃まで儀礼的なうそをつく子どもの割合が増えること、また、幼児期においては暗黙的に儀礼的なうそをつくが、児童期においては、自己防衛的な動機から他者志向的な動機へと動機が発達的に変化する可能性が明らかになった。以下に、今後さらに検討すべき課題について述べる。

まず、先行研究で多く検討されてきた自分の失敗や約束違反などの行為を隠すためのうそや、他者を騙すためのうその発達に関する知見との比較、統合が必要であると考えられる。例えば、自分の違反行為を隠すためにうそをつく行為と、心の理論の能力や抑制機能との関連が指摘されているが (Talwar, Gordon, & Lee, 2007; Talwar & Lee, 2008)、儀礼的なうそをつくる行為がどのような認知能力と関連しているのかといった点については今後の検討課題である。

また、言語的な表示規則という観点から、より多様な場面を含めた発達的变化を検討する必要があると考えられる。本論文で取り上げた先行研究は、主に、期待はずれのプレゼントをもらう場面における儀礼的なうそに関する研究であったが、対人場面において言語的な表出を調整する場面は多岐に渡る。例えば、他者に関する評価について、自分で思っているよりも過剰によく言うお世辞 (flattery) を用いる場面が挙げられる。Fu & Lee (2007) によると、3歳児はお世辞を使用せず、4歳頃から使用するようになり、5歳頃には安定して使用するようになることが示唆されている。また、Ma, Xu, Heyman, & Lee (2011) は、7～11歳児を対象とした研究から、11歳頃までに、他の人がその場にいるか、二人きりかなどの状況

に応じてお世辞を使用すべきかどうかを判断するようになることを示している。しかし、そうしたお世辞の機能についての認識やお世辞を使用する動機に関して、儀礼的なうそと同様の発達的变化がみられるのかどうかや、より多様な場面における言語的な表出調整行為の発達について、まだ検討されていない点も多く、さらなる研究の蓄積が期待される。

さらに、表示規則のような社会的なルールについての発達過程を考える上で、文化の影響を検討することは重要であると考えられる。例えば、自分自身のよい行いに対する賞賛をそのまま受け入れず、否定するといった謙遜としてのうそについて、7～11歳の日本の子どもはアメリカの子どもより、好ましく思う傾向が報告されている (Heyman, Itakura, & Lee, 2011)。また、大人を対象とした研究において、中国人はアメリカ人よりも謙遜としてのうそをより好ましいと判断する傾向があり、謙遜としてのうそを高く評価する傾向は、集団主義傾向の高さと個人主義傾向の低さと関連していることが示されている (Fu, Heyman, & Lee, 2011)。こうした日本人や中国人の傾向は、個人主義文化の欧米に比べて、人間関係が重視される集団主義文化であるという比較文化心理学の観点から、人間関係を壊さないように、言語的な表出を抑制することが望ましいという価値観が背景にある可能性が考えられる。儀礼的なうそやお世辞についてもこうした文化差を検討することで、言語的な表出の調整行為の発達的变化をもたらす要因を明らかにすることにつながり、新たな知見が得られる可能性がある。

引用文献

- Bok, S. (1978). *Lying: Moral choice in public and private life*. London: Quartet Books.
- Cole, P. (1986). Children's spontaneous control of facial expression. *Child Development*, *57*, 1309-1321.
- Ekman, P., & Friesen, W.V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, *1*, 49- 98.
- Fu, G., Heyman, G.D., & Lee, K. (2011). Reasoning about modesty among adolescents and adults in China and the U.S. *Journal of Adolescence*, *34*, 599-608.
- Fu, G., & Lee, K. (2007). Social grooming in the kindergarten: the emergence of flattery behavior. *Developmental Science*, *10*, 255-265.
- Gnepp, J., & Hess, D. L. R. (1986). Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, *22*, 103-108.
- Harris, P.L., Donnelly, K., Guz, G.R., & Pitt-Watson, R. (1986). Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, *57*, 895-909.
- Heyman, G.D. Itakura, S., & Lee, K. (2011). Japanese and American children's reasoning about accepting credit for prosocial behavior. *Social Development*, *20*, 171-184.
- Heyman, G.D., Sweet, M.A., & Lee, K. (2009). Children's reasoning about lie-telling and truth-telling in politeness contexts. *Social Development*, *18*, 728-746.
- 子安増生・田村綾菜・溝川 藍 (2007). 感情の成長：情動調整と表示規則の発達。藤田和生 (編) 感情科学, 京都大学学術出版会, pp.143-171.
- Ma, F., Xu, F., Heyman, G. D., & Lee, K. (2011). Chinese children's evaluations of white lies: Weighing the consequences for recipients. *Journal of Experimental Child Psychology*, *108*, 308-321.
- Saarni, C. (1979). Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, *15*, 424-429.
- Saarni, C. (1984). An observational study of children's attempts to monitor their expressive behavior. *Child Development*, *55*, 1504-1513.
- Talwar, V., Gordon, H. M., & Lee, K. (2007). Lying in elementary school years: Verbal deception and its relation to second-order belief understanding. *Developmental Psychology*, *43*, 804-810.
- Talwar, V., & Lee, K. (2008). Social and cognitive correlates of children's lying behavior. *Child Development*, *79*, 866-881.
- Talwar, V., & Lee, K. (2002a). Development of lying

- to conceal a transgression: Children's control of expressive behaviour during verbal deception. *International Journal of Behavioral Development*, **26**, 436-444.
- Talwar, V., & Lee, K. (2002b). Emergence of white lie telling in children between 3 and 7 years of age. *Merrill-Palmer Quarterly*, **48**, 160-181.
- Talwar, V., Murphy, S. M., & Lee, K. (2007). White lie-telling in children for politeness purposes. *International Journal of Behavioral Development*, **31**, 1-11.
- 楯 誠・新井邦二郎 (2004). 「うそ」に対する子どもの認識に関する研究の動向. 筑波大学心理学研究, **28**, 43-53.
- 上宮 愛・仲 真紀子 (2009). 幼児による嘘と真実の概念理解と嘘をつく行為. 発達心理学研究, **20**, 393-405.
- Xu, F., Bao, X., Fu, G., Talwar, V., & Lee, K. (2010). Lying and truth-telling in children: From concept to action. *Child Development*, **81**, 581-596.
- Zeman, J., Cassano, M., Perry-Parrish, C., & Stegall, S. (2006). Emotion regulation in children and adolescents. *Journal of Developmental and Behavioral Pediatrics*, **27**, 155-168.
- Zeman, J., & Garber, J. (1996). Display rules for anger, sadness, and pain: It depends on who is watching. *Child Development*, **67**, 957-973.

たむら あやな (昭和女子大学人間社会学部心理学科)

